盤古の天地開闢と道家思想

孫　樹林

はじめに

『古事記』編纂 1300 年を迎えたことにより，人類の誕生，国家の成立，ないしは天地の開闢など人類にとって恒久なる謎や課題があらためて提起され，文明転換期と言われる当今において多大な関心が寄せられている。偶然とはいえず，同文化圏の隣国の中国も近年，伝統文化ブームが高まりつつあり，その中で神話伝説への関心度が突出し，関連の研究も優れた成果を多々挙げている。

一方，裏付けとなるより詳細な史的資料の欠乏，とりわけマルクスの史的唯物論などに囚われているゆえ，中国における宇宙創成や人類誕生などに関する神話伝説の研究は，たいてい同じ唯物的次元で徘徊しており，諸々の論考に小異あっても大差なしという状況である。

それで，一家言をもって中国における関連の研究を否定，批判するのではなく，他の視点や異なるアプローチの可能性の有無を探るべく，本論はなるべく歴史の実態に即し，古人的宇宙観に立ちつつ，盤古の天地開闢の近似的原形を描出し，道家思想との関連性について考察してみた。そして，盤古の天地開闢などの神話研究において往々に回避され，否定されがちないくつかの問題を提起し，もって更なる議論，考察，実証を促進する一助になれればと期待している。

Ⅰ．盤古について

1. 混沌たる宇宙

他文明の神話伝説と同様に，中国の神話伝説でも宇宙天地が切り拓かれたことによって生成したとされている。それでは，切り拓かれた以前の天地宇宙は，いかなる状態であったか。中国の道家著作『淮南子』（注 1）は，次のように記述している。

天墜未形，冯冯翼翼，洞洞濁濁，故曰太始。（『淮南子』天文訓）
天墜の未だ形あらざるとき，冯冯翼翼，洞洞濁濁たり，故に太始と曰ふ。（A － 1）

文中の「冯冯翼翼，洞洞濁濁」とは，いずれも無形の貌（注 2）ということである。本書ではまた次のような記述もある。

天地未剖，陰陽未判，四時未分，萬物未生，汪然平静，寂然清澄，莫見其形。（『淮南子』俶真訓）
天地未だ剖れず，陰陽未だ判れず，四時未だ分れず，萬物未だ生ぜず，汪然平静，寂然清澄にして，其の形を見る莫し。（A － 2）

このように，天地宇宙が未だ切り拓かれていなかったときは，陰陽や四季や萬物がなく，「冯冯翼翼，洞洞濁濁」「汪然平靜，寂然清澄，莫見其形」という混沌たる状態であった。

屈原は『楚辞』天問の始めでも「遂古之初」を「上下未形」「冥昭瞢暗」「馮翼惟像」とし，『淮南子』と同様な宇宙観を持つ。屈原はさらに，「曰遂古之初，誰伝道之」とし，すなわち誰がその道を伝えたのだろうか，と天に問ったのである。

2. 盤古の誕生，天地の開闢

『淮南子』にはまた次のような記述がある。

有二神混生，經天營地。孔乎莫知其所終極，滔乎莫知其所止息。於是乃別為陰陽。離為八極，剛柔相成，萬物乃形。煩氣為蟲，精氣為人。（『淮南子』精神訓）

二神有りて混生し，天を經し地を營す。孔乎として其の終極する所を知る莫しく，滔乎として其の止息する所を知る莫し。是に於て乃ち別れて陰陽と為り，離れて八極と為る，剛柔相成し，萬物乃ち形す。煩気は蟲と為り，精気は人と為る。（B － 1）

この記述は，ただ宇宙誕生についての説明であり，屈原の問う「誰が道を伝えたのか」すなわち，宇宙がどのように誕生し，道が誰に如何に伝えられたかの答えにはならない。

三国時代の呉の徐整（注 3）が，その著書『三五暦紀』『五運歴年紀』において盤古が天地を切り拓いたことを記述し，これは史料でもっとも早い記述となる。

天地が鶏卵のように混沌であり，盤古がその中で生まれ，一万八千歳である。天と地が分かれ，陽と清が天となり，陰と濁が地となる。盤古はその中におり，一日九回変化し，天地ほど神聖である。天が一日に一丈高まり，地が一日に一丈厚くなり，盤古も一日に一丈伸びる。このようにして，一万八千年を経ち，天が数極高くなり，地が数極深くなり，盤古はきわめて長く成長してきた。のちに，三皇が生まれた。数は一から始まり，三に立ち，五に成り，七に盛り，九に拠る。ゆえに，天と地の距離は九万里である。（『三五暦紀』）（B － 2）

始めに，盤古が生まれたが，死にかけて体を分化する。息は風雲となり，声が雷霆となり，左の眼が日となり，右の眼が月となり，四肢五体が四極と五岳となり，血液が江と河となり，筋と脈が地理となり，肉が田地となり，発毛と髭が星辰となり，皮膚が草木となり，歯と骨が金石となり，精髄が珠玉となり，汗が雨となる。（『五運歴年紀』）（B － 3）

宇宙が誕生する過程を記述する二つの話は，通常前者を宇宙誕生の「卵生型」（「天地の分裂型」），後者を宇宙誕生の「身体化成型」（注 4）とされているが，しかしその内容から

考察すると，この二話は宇宙誕生に関する別々の話ではなく，いずれも盤古が宇宙を切り拓いた具体的なものであり，ただそれらは異なる段階のことを描いたのみである。

換言すれば，前者は太古時代から伝わってきた宇宙観である陰陽の学説によるものであり，無極から太極が生まれ，太極から両儀が生まれ，両儀から四象が生まれ，よって万物が生まれる。後者は前者を踏まえ，さらに盤古の死によって天地間の万物が形成される構図となり，詳細な記述をもって万物形成を具体化し，そしてこの宇宙，天地，自然に関するほぼすべてのものの生成を説明し，よって，無形から有形へ，単純から複雑へと変化する宇宙の原理を述べ，一生命・一物質として経歴すべき全過程である「生成→存続→死亡→転化」を過不足なく記述しえたのである。

3. その他の盤古の天地開闢についての記述

南朝仁昉（注 5）の『述異記』にも，盤古の宇宙開闢についての記述がある。

> 秦漢の俗説によれば，盤古の頭が東岳となり，腹が中岳となり，左手が南岳となり，右手が北岳となり，足が西岳となる。先儒曰く，盤古の泣きが江河となり，息が風となり，声が雷となり，目が稲妻となる。古説によれば，盤古の喜びが晴れとなり，怒りが曇りとなる。呉楚の間の説では，盤古夫婦が陰陽の始めであるという。（『述異記』）（C － 1）

これまでの伝説に比べ，『述異記』における盤古の宇宙開闢についての記述はより詳しくなり，内容も豊富になった。この話には，注目すべき点は三つある。第一，記述は，「秦漢の俗説」「先儒」「古説」「呉楚の間の説」という伝説の情報源を示していること。第二，体や感情が自然に化した具体的な内容を示し，しかも具体から抽象へとし，それらの相互対応関係が明確である。第三，「盤古夫婦」という説をはじめて持ち出し，かつ二人が「陰陽の始め」と記していることである。

盤古が死んで肉体や精神が自然に化したことを記述しているこの話は，従来の伝説内容を詳細化，具体化しつつ，盤古夫婦などの内容を増加させたが，以前の伝説に比べれば，後期的，低次元的特徴があると言ってよい。

明の周游（注 6）『開辟衍繹通俗志伝』は以下のように盤古の天地開闢を記述する。

> 盤古が体を伸ばすと，天はすぐ次第に高くなり，地は堕ちていく。その天と地がつながった個所があるが，盤古は左手に鑿をとり，右手に斧を持って，斧をもって切り，または鑿をもって開いた。自らの神の力により，久しくすれば天と地が分かれ，二つの気が上昇し，清らかなものは天となり，混濁のものは地となった。これより，天と地が切り拓いた。（『開辟衍繹通俗志伝』）（C － 2）

『開辟衍繹通俗志伝』になると，盤古は，斧や鑿をもって天地を切り拓くこととなり，そ

の天地開闢はより具体化してきたわけである。

『開辟衍繹通俗志伝』の付録『乱仙天地判説』では，盤古の天地開闢をさらに次のように記述する。

天地が，まるでスイカのように真丸く閉じており，その中に万物が含まれていた。計一万また八千年の間，凡てのものがその中に溶け込んでいた。金，木，水，火，土がその中に混ざっており，固いものは種のようであり，柔らかいものは中子のようであり，青，黄，赤，白，黒の五色もその中に溶け込んでいた。久しく閉じたまま開かないが，盤古が現れ，左手に鑿，右手に斧を持って，まるで瓜を斬るように二つに切り開けた。上の半分は次第に高まって天となり，含まれた青，黄，赤，白，黒が五色の祥雲となり，下の半分は次第に下がって地となり，これも青，黄，赤，白，黒が含まれ，五色の土石となる。天に昇った固いものは，人々が星と見ており，地下のものは石となる。星と石は同一のものである。もし信じなければ，今に星が地面に落ちたら，掘って見てごらん，いずれも地上の石と同じである。天下にも泉があり，留まるところがないため，人間社会に流れては，海に注いでいくのである。（『開辟衍繹通俗志伝』付録『乱仙天地判説』）（C－3）

『開辟衍繹通俗志伝』と付録『乱仙天地判説』とは，盤古の天地開闢についての記述はかなり異なるが，周游はわざと相違の内容を付録としてつけたのか，それとも後人が付け加えたのかは，いまだに判明できない。他の視点から天地開闢と誕生を記述し，五行説や天上の物質と地上の物質が同じであるなどを取り入れたのが興味深い。

『広博物志』（注 7）では，『五運歴年紀』の記載を引用する形で次のように記述する。

盤古は，龍の首に蛇の身，嘆息すれば風雨となり，吹けば雷電となる。目を開けば，夜明けとなり，目を閉じれば夜となる。死後，骨が山林となり，体が江海となり，血が淮河となり，毛髪が草木となる。（『広博物志』）（C－4）

ここでは，体が自然に化した内容がやや異なるし，はじめて盤古が龍の首に蛇の身とされる。同じく『五運歴年紀』からの引用というものの，内容上は『開辟衍繹通俗志伝』と相違している。その原因として，作者の杜撰または誤写などが考えられず，異なる底本が存在した可能性が考えられる。

晋の著名な道学者である葛洪は，著書『枕中書』（注 8）の中で，「玄都太真王」という「真神」から授けられた『真書』にも，盤古の天地開闢に関する記述もある。

昔，二義が未だ分れず，混沌たるもので形にならず，天地，日月も未だ備えず，その

形は卵のようであった。混沌玄黄の中で，盤古真人がすでにおり，それは天地の精であり，自ら元始天王と号して，その中を遊んでいた。この混沌たる宇宙が八劫を経て，両儀がはじめて分れた。また二劫を経て，太元玉女が生まれた。太元玉女は生まれてすぐものを言うことができ，生まれながらの美貌をもち，つねに厚い大地の間を遊び，太元聖母と号する。元始君が下に降りて彼女を見て，彼女と気を通じ，精を結んで上宮に招いた。その時に，陰陽が調和するようになった。一劫を経て，太元母が十三人の天皇を生み，治めて三万六千年。また九光玄女を生み，太真西王母と号し，西漢の夫人である。天皇が地皇を生み，地皇がまた人皇を生む。それから「八帝」（大庭氏，庖羲，神農，祝融，五龍氏など）や「三王」（夏禹，殷湯，周武）を得た。（C － 5）

上記記述の外，また複数の史書に盤古，または盤古の天地開闢に関する記述があるが，正統性の問題などにより割愛する。

Ⅱ．民間で口頭伝承されていた盤古神話

1. 盤古神話の誕生時期と流伝方式

盤古は，天地創造の神であり，時系列で言えば人類創造の神である伏羲・女媧よりも前に存在したはずである。しかし『史記』（前漢代）や『風俗通義』（後漢代）に伏羲・女媧についての記述があるが，盤古については呉代に成立した神話集『三五歴紀』になってはじめて記述された。これをもって，通常，盤古という神が考え出されたのは伏羲・女媧よりかなり晩かったと見られている。

しかし，早期の史書に記述が見られないからと言って，盤古に関する伝説が前漢代に成立した『史記』や後漢代に成立した『風俗通義』より遅かったとは限らない。なぜなら，盤古に関する伝説が，口承方式として限られた地域と限られた人々の間で太古より代々語り伝えられていたなどの可能性が否定できないからである。

中国の民間で盤古に関する伝説がどれほどあり，いかなる時代にわたって伝えられてきたかについては，現段階はなお統計しえない。文献に記述される盤古神話に関する遺跡は，中国の各地に散在し，北方より南方の方がはるかに多い。関係の統計（注 9）によると，広東省だけでもかつて 191 軒の「盤古廟」が建てられ，その中の一部は瑤族（注 10）が建てたものである。史書や各地方の風土記，そして中国に広がっている盤古神話に関する遺跡や民間の伝説からすれば，盤古神話は中国のほぼ全土に広がっており，中国文化圏に生活する各民族の共通的な神話，伝説，信仰であることは確実である。

盤古の天地開闢という神話の誕生次期と流伝ルートなどについて，資料の欠乏によりなお不明のままである。しかし，この神話が誕生後に中国のほぼ全土に広がり，かつ多彩な内容で展開されていったことは明らかである。

2. 盤古神話の地域性および民族性

盤古神話の誕生地域について，さまざまな説がある。北方より南方の方が盤古神話・文

化が盛んであり，その内容もより詳細であり，かつ最初に盤古神話を書物に記述した徐整が南方人であることから，茅盾氏をはじめ多くの研究者は「盤古神話は南方で誕生した後，次第に北方に伝えられていった」（注 11）とし，馬長寿氏などの研究者は，「中国神話の中の盤古は，漢民族の神ではなく，漢文化が瑤文化と融合した後に，盤古は神として瑤族から漢族化したもの」（注 12）と主張する。そして，袁珂を代表とした一部の研究者は，「盤古とは，盤瓠の発音によるもの」であり，「盤古神話は，たぶん南方少数民族の神話の中の盤瓠神話を吸収し，造られたもの」（注 13）とし，さらには何新氏などの研究者は，盤古神話は「中国の西南地域を通じて，中国の内陸部に伝わってきた西アジアとインド神話であった」，あるいは「仏教とインド文化が中国文化と融合した産物であった」（注 14）と推論している。

これらの南方論に対し，張振犁氏らは「盤古の天地開闢の神話は，南方に誕生したのではなく，北方の中原地方に誕生したもの」（注 15）と指摘する。前者の南方論より，張氏らの北方論に賛同したい。以下の諸点はそれの主な根拠となる。

第一，徐家の居住の地域変遷を考察してみよう。盤古神話を最初に記述した徐整は，南方人ではあったが，名門であった徐整の祖先はもともと今日の河南省洛陽や山東省に住居し，戦乱などにより漸次南方へ移動していったのである。今日の浙江省や江蘇省に徐家に関する伝説が多くあるし，徐家の廟も建てられたことから，史上においてその影響力がかなり大であったことがうかがえる。したがって，名門の子孫として，徐整は先祖から代々伝えられてきた古き伝説を『三五歴紀』『五運歴年紀』に記述した可能性は否めない。

第二，文化と地理の次元から考察してみよう。徐整が記述した盤古神話の著作名は，『三五歴紀』と『五運歴年紀』となっているが，この「三・五」という数字の文化的含意は明らかに北方で誕生した道家の論理に由来したもので，南方の呉越文化とは全く異なっている。その傍証として，盤古は死後，その死体が「四極」「五岳」と化したと記述されるが，この「四極」「五岳」もいずれも中国古代の北方の地理文化の基本概念であり，しかも「五岳」の中，「南岳」を除けば，後の四岳はいずれも北方にあるのである。しかも，盤古神話が誕生した可能性が高い北方，すなわち黄河流域の太行山，桐柏山，および河南省の西部などには，神話の中に登場した地理・地形が一致しているものが少なくない。

第三，済源太行山盤古寺に関わった盤古の天地開闢の神話があるが，これは『三五歴紀』『五運歴年紀』の記述とほぼ一致している。したがって，この『三五歴紀』『五運歴年紀』の記載は盤古神話のもっとも古い形態の可能性が高いのみならず，徐整の盤古神話は南方系のものではなく，北方のものであることも反証されることになる。

第四，他地域に比べ，盤古神話が誕生したと思われる中原地域では，龍崇拝がかなり篤い。中国人は古来，自分たちを龍の末裔としているが，『三五歴紀』『五運歴年紀』などの書籍に「盤古氏龍首」と記述されている。桐柏山では，さらに盤古が龍の息子と言い伝えられ，桐柏山の盤古像の頭部には角が二つあるのである。

第五，桐柏山地域では，旧正月は盤古の誕生日であり，この日になると，盤古は帰ってきてお正月を過ごすことになるとし，人々は清浄にしなければならないという民俗風習が

代々伝えられている。そのため，この地域ではお正月から十日までの間に，遊芸など賑やかな活動を催さず，十日以降になってはじめてお正月の雰囲気が現れるのである。

第六，この地域には，盤古村，盤古山，盤古廟，盤古墳，盤古神磨，盤古石箱，盤古井戸などなど盤古に関する文化遺産が多々あり，物質文化財の次元からも盤古神話の発生源を証明している。

以上に基づいて推論すれば，盤古神話は，中原地方の漢民族の伝説に由来し，それの発生源は揚子江と黄河との中間地帯，すなわち中原地方の河南省西部にある，北の済源太行山から南の桐柏山あたりまでの間になるのであろう。そして，その中心が河南省の桐柏県と泌陽県の桐柏山一帯（注 16）である確率はきわめて高い。

Ⅲ．盤古の天地開闢における次元・時期等についての考察

盤古の天地開闢について，前記の諸記述は基本的かつ主要なものであるが，それ以外に各時代の著書や地方誌にも数多く見られる。それらの内容を本文で全て羅列することが不能であるが，概して言えば大同小異であり，外形が異なっても神髄がほぼ一致していると言えよう。記述の外，各地に現存（または廃墟となったものや未発見のもの）している廟などの関連文化財とりわけ民間で代々口承されている部分については，現段階ではとうてい把握できない。しかし，これまで公表された資料や情報から判断すれば，これらの部分は内容や性質においてかなり類似的であり，実質的な差がないのである。

それゆえ，以下における考察は主に前記言及したものを主要材料とし，それ以外のものはただ座標として参考用にする。

中国の神話伝説にさまざまな盤古が登場し，色とりどりのバリエーションを演出してきたため，その明晰なる全貌をなかなか把握し難い。しかし，膨大な情報を濃縮し，混沌たる遠景を明晰化することによって，それの基本と本質が自ずと顕現できるのである。それで，以下では複雑な盤古神話を内容，時間，属性，意味などの視点に立って考察してみたい。

1. 盤古の天地開闢神話の骨子

まず，前記で引用，紹介した記述と伝説（A1 ～ C5）の内容を以下に簡約する。

盤古神話の内容（表 1）

番号	内　　容
A－1	天地開闢前の無形で混沌たる太始状態。
A－2	天地開闢以前の陰陽・四時・万物なしの寂寥たる無形な宇宙。
B－1	混生の二神による天地経営，時空の無限大，陰陽・八極・万物・人間の誕生。
B－2	卵のような天地に盤古が誕生，一万八千歳，天地分離，陰陽形成，一日九変化，天地同様の神聖，天地と共に成長する，一万八千年を経て大成長した，三皇誕生，数の形成，天地間は九万里。

B－3	盤古の生まれ，死に伴う身体の分化，体はそれぞれ大自然の一部に化す。
C－1	盤古の身体が五岳・江河・風・雷・稲妻・晴れ・曇りと化す，盤古夫婦が陰陽の始めとなる。
C－2	盤古の成長，鑿と斧で天地を切り拓く，二気上昇，天地形成，天地開闢に成功。
C－3	西瓜の如き天地に万物が含まれる，一万八千年で万物が溶け込む，金･木･水･火・土が混生，青・黄・赤・白・黒の五色も溶け込む，盤古の出現，鑿と斧で天地開闢，天地を二分する，上半分は天となり下半分は地となる，五色の星と石の誕生，雨と泉と海の関係。
C－4	盤古は龍の首に蛇の身，体を動けば風雨･雷電･昼･夜となる，体が山林･江海･淮河・草木となる。
C－5	二義未分・混沌たる無形で天地・日月なしの卵形の宇宙，盤古真人がその中にいる，天地の精で元始天王と自ら号す，八劫を経て両儀が分かれ，また二劫を経て太元玉女誕生・太元聖母と自ら号す，元始君が下に降りて太元玉女と気を通じ精を結ぶ，陰陽調和になる，一劫を経て太元母が 13 人の天皇を生む，治めて三万六千年，九光玄女を生んで太真西王母と号して西漢の夫人となる，天皇が地皇を生み，地皇が人皇を生む，八帝と三王の誕生。

上記（表 1）の各内容は，行文上の便宜のためにローマ字と番号をつけた。A，B，C は主に盤古神話を時間軸に配列しているが，1，2，3，4，5 という数字のほうはその内容と一定の関係を持つものの，必ずしも一定の空間軸に基づいて配列したものではなく，あくまでも行文上の順番を示すものにすぎない。

2. 盤古神話を時間軸に考察する

もし，上記（表 1）の内容を物事の発生順によって，①「宇宙誕生以前」，②「天地開闢と天地形成」，③「死による物化」，④「人世誕生」に分類すれば，次の（表 2）になる。時間軸を中心に考察するため，（表２）は他の要素をなるべく削除し簡約化した。

盤古神話内容の発生順（表 2）

発生順	内　　容	旧番号
1－1	天地開闢前の無形で混沌たる太始状態。	A－1
1－2	天地開闢以前の陰陽・四時・万物なしの寂寥たる無形な宇宙。	A－2
2－1	盤古の成長，鑿と斧で天地を切り拓く，二気の上昇，天地の形成，天地開闢成功。	C－2
2－2	天地に万物含まれる，一万八千年で万物溶け込む，金･木･水･火･土の混生，青・黄・赤・白・黒溶け込む，盤古出現，鑿と斧で天地開闢，天地二分する，上は天･下は地，五色星･石，雨･泉･海。	C－3
3－1	盤古の誕生，死による身体の分化，それぞれ大自然の一部に化す。	B－3

3－2	盤古夫婦が陰陽の始め，盤古の身が五岳･江河･風･雷･稲妻･晴れ･曇りと化す。	C－1
3－3	盤古は龍の首に蛇の身，動くと風雨･雷電･昼･夜となる，体が山林･江海・淮河・草木と化す。	C－4
4－1	混生の二神，天地経営，時空の無限大，陰陽・八極・万物・人間の誕生。	B－1
4－2	卵形の天地，盤古の誕生，一万八千歳，天地分離，陰陽形成，一万八千年を経て大成長，三皇誕生，数の形成，天地間は九万里。	B－2
4－3	二義未分・混沌無形，天地・日月無き卵形の宇宙，盤古真人いる，天地の精，元始天王と号す，八劫を経て両儀が分かれ，二劫を経て太元玉女誕生，元始君が太元玉女と結ぶ，陰陽調和，一劫を経て 13 人の天皇を生む，治めて三万六千年，九光玄女の太真西王母，西漢の夫人，天皇・地皇・人皇の誕生，八帝と三王の誕生。	C－5

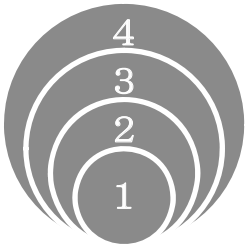
盤古の天地開闢神話を発生順と抽象度によって配列した（表 2）を一覧すれば，混沌たる天地から盤古の誕生，天地の開闢，万物創造，人世の形成という全過程が明らかになる。いわば盤古の天地開闢の時間軸の全体図と言ってもよいものである。

（表 2）は考察便宜のため，あえてその内容を①「宇宙誕生以前」，②「天地開闢と天地形成」，③「死による物化」，④「人世誕生」に分類したが，実際はその内容はそうとうの部分が重なっており，かつ同じカテゴリーの中でも重なっているものも少なくない。

もし，この（表 2）をより簡略化すれば，次の（表 3）のようになる。

盤古の天地開闢神話の発生順（表 3）

（表 3）は四段階に分けて考察したが，実は特に高い段階の内容が低い段階の内容を包含しており，分割不能である。それらの相応関係は以下の（図 1）で表すことができよう。



盤古の天地開闢神話内容の関係図（図 1）

ただし，1の盤古の天地開闢以前の混沌たる状態について，その後の2，3，4において触れていないものがある。しかし，これで2，3，4が1を全く含まないというより，中国思想の根底や常識から考えれば，関連の言及がなくても，それの大前提として潜んでいるはずと思われる。

3. 四つの問題点

盤古の天地開闢神話は，中国思想の宇宙観および中国の文明史と次のような対応関係にあり，一体化している。

盤古神話		**伝統的宇宙観・文明史**
盤古誕生以前の宇宙	←→	混沌たる元始
盤古誕生と天地開闢	←→	陰陽・天地の形成
盤古の死による物化	←→	天地間の万物の形成
盤古死後の人世誕生	←→	三皇五帝・人世の出現

天人合一などの中国思想のもとで，これらの相応関係はいかなる意味をもつのであろうか。以下の四点は注目すべく，盤古神話の真髄であると考えている。

①神の世界から人間の世界へ。混沌たる元始宇宙から，盤古の誕生・天地の開闢・万物の創造を経て人世の出現に至るまでは，実は，同じ時空で行われたものではなく，高次元から低次元へ次第に展開されていくものである。すなわち，盤古の天地開闢神話の始点から終点までの全過程は，神以前の世界→神誕生の世界→神創造の世界→神不在の人世世界，というそれぞれの高次元から低次元へと次第に形成されたものである。

②無から有を生む。無生命の混沌状態から陰陽という対立する二要素が形成し，そして盤古が誕生し，天地開闢や万物創造が始まるわけである。すなわち，盤古の天地開闢の過程は，無→陰陽→神→万物・人間，というプロセスなのである。

③盤古の挙動により低次元の万物が創造される。盤古は偉大な神であるゆえ，その意図的な行為または体の自然的な動きによって宇宙，天地，万物，人世，人間が創造された。すなわち，彼の思想や行動によって，彼より低次元にある世界のものが自ずと創成されたのである。

④死による物質の転化現象。盤古は神の世界で死んだが，しかし，彼の死によって彼の命が神の世界で終わったと同時に，彼の身体はそれぞれ低次元の万物に転化していったのである。しかも，この物質不滅のプロセスは単一的次元で完成されたのではなく，複数の次元で展開されたのである。

まとめ

老子は『道徳経』で宇宙の創成について次のように論じる。「物有り混成し，天地に先だつて生ず。寂たり寥たり，獨立して改まらず，周行して殆らず，以て天下の母と爲す可し。

吾，其の名を知らず。之に字して道と曰ひ，強ひて之が名を爲して大と曰ふ。」（『道徳経』）この論は宇宙創成の原理を述べたものであり，道家の宇宙観の基本と思われる。

以上の考察により明らかになったが，盤古の天地開闢神話には，老子の宇宙創成論をはじめ，道家の論理が随所存在している。たとえば，「道生一, 一生二, 二生三, 三生万物」（老子『道徳経』）という生成論，異なる空間に異なる生命が存在する多元的宇宙観や生命論，物化の思想，等々である。すなわち，盤古の天地開闢神話は道家思想と同源であり，それと一体化している。いわば，この盤古神話は空中楼閣ではなく，道家思想の基に建てられた堅固な中原文明の大廈なのである。

本論は，盤古の天地開闢神話を時空によって四次元に分けて図式化して考察したうえ，本神話の文化的源流やその意味について探り，とりわけそれが道家の宇宙観との一体関係を論じ，先行研究で言及されなかった四つの注目すべき問題点を提起し，それらが盤古の天地開闢神話における神髄であると指摘した。紙幅により，盤古神話の中に潜んでいる歴史の真実性や神話の現代における文化的意味等々，より深く考究すべきことについては論及できなかったが，今後の課題としたい。

注

1. 『淮南子』は前漢武帝のころ，淮南国の王劉安（高祖の孫）と彼の食客である方術の士との共作であると見られ，古代の伝説や記載を引用するものが多く，道家の理論書のみならず，天文，地理，神話，伝説などの多分野に関わる書籍として，従来重視されている。
2. 高誘『淮南子注』。高誘，東漢の人，生没不詳。建安十年（205 年）から司空掾などの官職を歴任，著書に本著の他，『孟子章句』『呂氏春秋注』『戦国策注』などがある。
3. 徐整, 三国時代の東呉の太常卿。『隋書』の記述によると, 彼は『毛詩譜』『孝経黙注』『三五暦紀』『五運歴年紀』などの著書があり，盤古が天地を切り拓いた伝説を記述する最初の著作である。
4. 閻徳亮は，著書『中国古代神話文化尋踪』（人民出版社，2011 年 10 月）で，『三五暦紀』『五運歴年紀』の中で記述する二つの伝説を異なるものとし，「卵生型」と「身体化成」としている。
5. 南朝梁の任昉が撰したとされる志怪小説集，二巻。任昉（460～508），南北朝時代の文人,「竟陵八友」の一人, 字は彦昇, 著書に『述異記』の他『文章縁起』（偽作説もあり）がある。
6. 周游，明の人，五岳山人と号し，生没など不詳。明の宗禎時代の人物とされる。六巻八十回の『開辟衍繹通俗志伝』を著し，盤古の天地開闢から周の武王までの「志伝」を記述している。
7. 明の董斯張が撰し, 全五十巻。董斯張（1587～1628), 明末の浙江湖州の詩人, 本名嗣章, 字は然明。『三言二拍』の著者馮夢龍, 凌蒙初の親友, 著書に『広博物志』『吴興芸術補』

『静嘯斎詞』などがある。

8. 葛洪（283～343），西晋・東晋時代の道教研究家，著述家，著名な煉丹家，医学者。字は稚川，自ら抱朴子と号する。有名な著書に『神仙伝』『抱朴子』などがある。本文の底本は『正統道藏』洞真部譜録類の『元始上真衆神記』によるものであり，編纂者は不詳。
9. 閻徳亮『中国古代神話文化尋踪』，人民出版社，2011 年 10 月，8 頁。
10. 瑤族は中国の少数民族の一つ，ミャオ・ヤオ系の民族で，広西，湖南，広東，雲南，貴州などの山地に居住し，主として農業に従事する。
11. 茅盾『中国神話研究初探』，上海古籍出版社，2005 年，第 18 頁。
12. 馬長寿『苗瑤之起源神話』，社会科学文献出版社，2002 年，第 139 頁。
13. 袁珂『中国神話史』，重慶出版社，2007 年，102 頁。
14. 何新『諸神的起源』，生活・読書・新知三聯書店，1989 年，第 179，182 頁。
15. 孫留平編『盤古聖地論盤古』，文史出版社，2006 年，第 27 頁。
16. 注 9 に同じ，第 10 頁。